

〈書 評〉

パプアニューギニアの食生活

—「塩なし文化」の変容—

鈴木 継美著 (中公新書 1044)

新書版 239頁 中央公論社 1991年

近年、生態学や健康科学が注目をあび、病気ではなく人をみることに力点が移ってきて、人間が自然とどのように対応しながら生存を続けていくかを正確にみていくことの大事なことが認識されだしている。私は本来は実験屋であるが、数年前農山村において就学前から中学生の子供を持つ有識主婦とその子供達を対象にして食と健康に関する調査を企画・実施する機会があった。この経験を通じて、人類生態学という学問が地域に立脚した保健活動を考えるときに有用であること、保健活動を行うに際しては、地域ごとに、その地域生態系の特色を把握しておくことが必要であることを学んだ。また、公衆衛生学における実験系の成果は、全体を捉えたうえでなければ自己目的化してしまって期待はずれなものに終わること、しかし、実験が加えられなければ人間が健康に生きていくための知識は確実なものにならないことを再認識した。

この経験以来、人類生態学関係の出版物に注意を払うようになった。昨秋出版されたわが国の人類生態学のパイオニアである鈴木継美著「パプアニューギニアの食生活」は、地域生態系の特色を自然科学的に掘むことの意味を実証的に教えてくれている。パプアニューギニア西州オリモア台地のギデラ族を中心に、1971～1972年、1980年、81年、85年、86年、88年、89年の7回にわたって実施された調査により集積されたデータ・資料の分析結果を日本と比較しながら紹介している。

パプアニューギニアの中で最も発展していない地方であった西州は、州都グルーに近い南部からゆっくりと近代化が進められていた。西州北部は、1981年に鉱山開発の話が動き出すまでは政府から見捨てられたに等しい状態にあったが、鉱山開発によってこの数年様変わりしつつある。鈴木らは、このような変化を背景にしながら1971年の調査を皮切りに、対象地を西州各

地に拡げて人類生態学の研究として野外調査を継続してきた。パプアの人びとは気づいていないけれども、彼らの生存にとって重要な環境条件としてどんなものがあるのか、またはっきりと彼らが認識しており、それに対する対応策を講じている環境条件は何かを明らかにすることを研究の重要な課題としており、本書ではその中で食と栄養にかかわる事柄をとりあげている。

注目すべきこととして、ギデラの人びとは気づいていないけれども、著者らの眼からみると重要と思われる食と栄養にかかわる要因として、われわれにはあるが彼らにはない条件が多いことが指摘されている。すなわち、彼らは飽食していない、脂肪の摂取がきわめて少ない、砂糖も海岸の村（この村は州都グルーに最も近く、砂糖等の購入食物を利用入する機会が多い）以外ではほとんど摂取されていない、塩は最近増えてきたものの、そもそもは「塩なし」の状態に近い、鉛の摂取は海岸の村を別にすればきわめて少ない、カドミウムもほとんど摂取されない等、いくつもの事項が数えられるとしている。これは、ギデラ族の食生態が根栽農耕を加えた狩猟・採集に基づいており、われわれのいわゆる進歩した工業化経済に立脚する食生態は、余分なもの、健康に悪影響を与えるものを多種類にわたって含んでいることを示すものであるとしている。さらに、近年、ギデラ族の人びとに対し外の世界から供給されつつある食物は、糖質、脂質含量が高く、繊維が少なく、ナトリウム含量は高いが鉄含量は低いといった特徴を示しており、外来の食物への依存度が高くなると、いわゆる「西欧型」の持つ悪しき特性が持ち込まれることになる懸念している。また、パプアの人びとの生活に対し、外部の者が気軽にあしろう、こうしろと言ひ、それが実施されたとき、適応状態にある複雑な構成を持った生態学的メカニズムが破壊される危険が生じると警告している。

著者らの研究に取り組む姿勢として、著者らが観察し、聞きとり、測定し、分析した事実のたしかさの問題を常に気にし、これについて問題となる事項を繰り返し扱い、また手をかえ品をかえて問題にしようとする努力が感じとれるが、人類生態学の実験を学ぼうとする者にとってはよいお手本を示してもらったという気がする。

山田重行（生理衛生学部）